

田中裕一における斎藤喜博「単純化」概念の拡張

—水俣病の授業における課題設計を中心に—

内 山 仁

1. 問題の設定

本稿の目的は、日本で最初に水俣病を主題化した授業（1968年）が、教育方法上も新たな視点に基づいて設計されたものであったことを解明することである。

水俣病問題は、単に一企業の起こした事件ではなく、日本の高度経済成長における負の遺産であり、同時に明治以降の日本の近代化における負の遺産である。この問題は、日本の「圧縮した近代化」を象徴するものであり¹、そこには健康被害にとどまらず、差別の問題や環境の問題など、様々な問題が輻輳して現れてきた。

したがって、この問題を授業で取り扱う際には、その複雑性ゆえ、様々な方法による接近が可能であり、教師の専門性が問われてくる性質をもつ。本稿では、日本で最初の水俣病の授業を検討しながら、それを実践した教師が授業の設計の過程で到達した教育方法上の新たな視点について考察する。

2. 研究の方法

本稿では、水俣病を日本で最初に授業化した熊本市の中学校教師田中裕一（1930～2003）の実践を検討する。田中の実践については、和井田清司による資料収集やインタビューが存在する²。したがって、本稿では田中の授業の実態そのものについて詳述するのではなく、教育方法上からの分析を試みた。

授業を設計するにあたって、田中は斎藤喜博（1911～1981）の「単純化」の概念に示唆を受けており、また、示唆を受けるのみならず、田中自身で「単純化」の概念の拡張を行っている。この「単純化」の概念との出会いや実践における展開を軸として田中の実践を検討したい。

キーワード：単純化 斎藤喜博 水俣病 授業の設計 田中裕一

¹ 佐藤学「学力を問い直す」、岩波書店、2001年、32頁

² 和井田清司編著『戦後日本の教育実践 リーディングス・田中裕一』学文社、2010年、など。

佐藤学は、米国の単元学習の歴史を検討する中で、授業の方法的組織について、「教材と学習経験の双方がダイナミックに組織される」ための条件として、「組織される教材と子どもの学習経験の両方が、制度的な枠組みから解放されていること」、「教材と学習経験を学習の有機的な単位に構成する核となる主題（課題）が成立していること」、「教材と学習経験を担う教師の構想力と方法意識が成熟していること」の三点を挙げている³。田中が授業を行った当時の学習指導要領には水俣病はもちろん、公害の文字もなく、その状況で水俣病を主題とする授業を行うことはある種の「制度的な枠組み」からの解放を示していたし、新たな「核となる主題（課題）」の成立を示していた。本稿は「単純化」概念の導入と展開という視角から田中裕一という教師の「構想力と方法意識」を解明する。

本稿では、田中と斎藤の出会いから振り返り（3章（1））、斎藤における「単純化」の概念を押さえた後（3章（2））、田中の授業を検討し（4章）、教材の設計（5章）と生徒の学習経験の設計（6章）の両面から、田中が斎藤から示唆を受けながらどのように実践を設計したのかを検討する。

なお、この授業の記録は「授業案」のみならず、授業中の教師と生徒の発言の記録である「授業の記録」、さらに「授業研究会記録」として残され、公刊されている。公刊物はいくつか存在するが、本稿では1973（昭和47）年5月発行の田中裕一・吉田三男著『公害と教育研究資料 2 水俣病の教材化と授業』を用いることとする⁴。

3. 斎藤喜博と「単純化」

（1）斎藤喜博の水俣講演（1963年）

田中裕一は水俣病の授業実践に先立って、熊本県教職員組合の教文部長を務めていた（1961～1963年）。この間、田中は県の教育研究集会在主催する講演会の講師として国分一太郎（1961年）、上原専禄（1962年）、斎藤喜博（1963年）を招聘している。この三人との関係および彼らからの学びは、その後の田中個人の実践にも影響を与えている。特に、斎藤喜博からの影響については、授業における「最高のものの単純化」という点において顕著であった。

興味深いことに、国分一太郎（熊本市）、上原専禄（菊池市）に続く斎藤喜博の招聘地は水俣市であった。田中と斎藤の関係を考察するにあたり、最初に斎藤による水俣訪問を検討してみよう。

熊本県教職員組合が発行する『熊本教育』の190号（1963年11月）には、巻頭写真に斎藤の

³ 佐藤学『米国カリキュラム改造史研究』東京大学出版会、1990年、332頁

⁴ その他の収録文献としては、熊本県国民教育研究所・熊飽社会科サークル・熊本県教職員組合編『公害と教育—水俣病を中心とした現場実践のために—』（いわゆる「赤本」）1973年10月、和井田清司前掲書、がある。

講演の様子が掲載されている⁵。この時、斎藤を迎えたのは、水俣市立袋小学校の教師たちであった。袋小学校は水俣病患者の最多発地帯を校区に持つ学校である。年明けの『熊本教育』192号（1964年1月）にはこの講演の詳細が掲載されるはずであったが、192号の「あとがき」には講演の速記原稿が斎藤の了解を得られず掲載できなかった旨の謝罪の言葉が載り、講演内容の詳細を知ることはできない⁶。ただ、その要旨は「第13次教研速報」の「号外」で知ることができる⁷。

「現代における教育の創造」と題された講演で、斎藤は前年度まで11年間にわたって勤務した島小学校の経験から話を始める。まず、「日本中のあらゆる職種の人が、一万人近く」同小を訪れ、教育の問題を語り合ったことを紹介し、教育に対する意識が高まっていることを指摘する。次に、標準学力テストや知能テストの結果を紹介し、偏差値の上昇（47から56）を示しつつ、「知能は変るものだ」ということを主張する。また、「島小の教育の基本」として「子どもたちの可能性は無限」であり、「この可能性を引き出すことこそ教育」であり、「文化遺産を『拡大』『強化』『再生』させること」が「私たちの教育」であると述べている⁸。さらに教師と子どもが「教材を媒介として火花を散らして激突すること」が重要であり、そのために「教師は教材に立向かつてどこまで高めるか目標を持つと同時に、一人一人の子供の可能性を考えなければなりません」と述べている。

斎藤の講演は、前述の理由で広く公開されることはなかったが、田中は講演を企画・運営する過程で、斎藤と個人的な接触を持った。さらに田中は講演後、斎藤の群馬の自宅を訪問している⁹。後年、田中はその時のエピソードを次のように語っている¹⁰。

斎藤喜博さんとずっと、散歩してたんですよ。すると小さなお宮があって、その社の屋根の構造をみながら、斎藤さんが、きわめて単純な美しさだと、彼が言ったんですね。そういうのが、やっぱり一つのヒントになっているわけですね。本当に複雑なものを単純化する、これがやっぱり教育っていうものの一つの、企業秘密だと思うんですね。だから、研究者が出来ないことは教育者が出来て、研究者が出来ないことというのは単純化だと、という風に

⁵ 熊本県教職員組合文化部『熊本教育』No.190、1963年11月

⁶ 熊本県教職員組合文化部『熊本教育』No.192、1964年1月、78頁

⁷ 熊本県教職員組合共同デスク「第13次教研速報」号外、1963年11月2日

⁸ ここには「単純化」の言葉はない。

⁹ 和井田（2010）の「年譜」には「打合せのために」とあるが、これは講演の打ち合わせではなく、事後の講演記録（文字記録）の『熊本教育』掲載にかかる打ち合わせと思われる。

¹⁰ 和井田清司編『戦後教育実践の奇跡～田中裕一リカバリー』（第二集）、2004年、34頁。なお斎藤の方では田中に対する言及は確認されない。ただ、1963年に詠まれたものとして「肥後椿長楽の豊かに蕾持つを遠々に君の持ちて来りぬ」の歌がある。『斎藤喜博全集』第15巻2、1971年、247頁。また「年譜」の昭和38年12月22日には「熊本の田中裕一氏来宅肥後椿持参」とある。田中は肥後椿栽培の専門家でもあった。

私は思っているんですね。教育者の仕事はそこにあるんだと。

斎藤の水俣講演においては、要旨を見る限り水俣病への言及はない。また田中の方でも水俣病実践に関するアイデアも「まだなかった」¹¹。しかし、田中は授業における「単純化」の重要性について斎藤から気づきを与えられたことを上述のように語っている。

また、斎藤自身にとっても、この時期は「単純化」の概念が得られていく時期であった。1964（昭和39）年に出版される『授業の展開』の執筆は、斎藤の「あとがき」によれば、1963（昭和38）年の秋以降と推定される。1963年12月に斎藤を訪問した田中は、まさに斎藤がその時に考えつあったこととして「単純化」の話を開いたであろう。

(2) 『授業の展開』（1964年）における「単純化」

斎藤において「単純化」は以前より使用される語であった。例えば、1960（昭和35）年の『授業入門』にもその語を見ることができる¹²。しかし、この時は「単純化」よりも「整理」や「きりとり」が重要な概念であった。「単純化」が論述の中心に出てくるのは『授業の展開』においてである。

『授業の展開』において、斎藤は「授業がその持つ機能を発揮し、教師も子どもをも変革させ、新鮮にし、創造的にしていくようなものになるためには、その授業が、明確な方向性を持ち、また単純化されていなければならない」と述べ、「方向性」と合わせて「単純化」の重要性を指摘する。斎藤によれば「教材そのものも独立した方向性を持っているもの」であり、「教材の持っている方向性を、生きた現実の授業のなかに生かして」、「授業での方向性」を持たせていくのが授業展開の根本条件であると指摘する¹³。

続いて斎藤は「方向性を持った授業は、必ず単純化されてもいる」と述べ、「単純化」の必要性について述べる。その理由について、「方向性は当然単純化を必要とするのだし、また単純化されることによって方向性がさらにはっきりし、授業展開に力と方向が生まれ、教室全体が一つの方向に向かって緊張し集中し、脈うっていくようになるからである」と述べている。このように、授業に力動性を生み出すための「方向性」が斎藤にとって重要な概念であり、「単純化」はそれを導く方法であり、それは「複雑ないくつかの方向があって、それを一つにしほっていくこと」とされていた¹⁴。

¹¹ 和井田清司編『戦後教育実践の奇跡～田中裕一リカバリー』（第一集）、2004年、44頁

¹² 斎藤喜博『授業入門』、国土社、1960（昭和35）年（引用は新装版2006年を使用）、69-70頁

¹³ 斎藤喜博『授業の展開』、国土社、1964（昭和39）年（引用は新装版2006年を使用）、69-70頁

¹⁴ 同上、76-77頁

4. 最初の水俣病授業

田中裕一による水俣病の授業は、1968（昭和43）年11月20日、中学3年生社会科の経済分野における資本主義経済の諸問題の一部として位置づけられ実施された。単元は第一時「日本の公害の実情と問題点」、第二時「熊本への公害（水俣病）」、第三時「公害についての整理的討論」から構成され、第二時が公開授業として実施された。

田中が日本で初めて水俣病の授業をするに至った動機については、現地水俣の教師に代わってでも実施すべきという思いがあったからだが、具体的にはいくつかの契機が存在する。まず、教文部長時代に石牟礼道子からの依頼によって支援した熊本市での写真展がある。桑原史成による「水俣病写真展」は、第10回熊本教育祭の教育祭展覧会の部として開催された（1964年2月28日～3月4日鶴屋デパート）。ここで用いられた写真パネルは田中の水俣病の授業で使用された。また、授業の年（1968年）にあつては、9月26日に政府による公害病の認定があり、そのことも授業実施の後押しとなった。

田中は「題材について」で、「現在の社会科教科書には、高度成長が出ているが、そのかげにある公害問題が出ていない。だが、この問題を避けては本当の意味で、今日の高度成長を考えたことにはならない」と述べ、既存の制度的枠組みを離れてでも公害問題を取り扱う意義を述べている。また、「本時の目標」として「（1）水俣病患者の記録と写真と肉声でその実態を知らせる。（2）水俣病認定までどこに問題があったかを理解させる。（3）水俣病の責任はどこにあったかを理解させる。（4）どうしてこの問題がおこったかを理解させる。（5）どう解決すればよいかを考えさせる。」の五点を挙げている。

本授業では事前学習として、生徒たちは六つのグループに分けて調べ学習を行った¹⁵。その成果については、授業中に適宜指名され発表されることで全体に共有された。

実際の授業はおおむね「本時の展開」の流れで実施された。「授業の記録」によれば実際には「導入」部分には20分、「展開」部分には23分、終盤部分には7分が費やされた。

水俣病の症状や認定までの経過、また「不知火漁民争議」などについては、事前のグループで調べたことが活用され全体で共有された。また、「展開」部分の最後には「猫400号実験」（1959年10月）と「見舞金協定」（1959年12月）が考察された。終盤は、その考察をもとに「企業の利潤追求」と「人間性」の関係について議論された。

この授業は田中が述懐するように、かなりの緊張感の下で実施された。参観者の感想の中には「悲惨すぎる」、「暗い面ばかりを強調している」、「中学生にはまだ判断する力がない」といった否定的なものもあった。

¹⁵ グループは次の6グループであった。1 水俣病の症状、2 患者・漁民側の動き、3 水俣病研究者たちの動き、4 会社側の動き、5 政府認定までの動き、6 認定後の動き

「本時の展開」

| | 学習活動 | 時間 | 指導上の留意点 | 資料 |
|----|---|-----|---|--|
| 導入 | <ul style="list-style-type: none"> ◎水俣病の実態を知る イ 認定した厚生大臣のインタビューを聞く ロ 患者の声を聞く ハ 写真の説明を聞く ニ 手記の中で <ul style="list-style-type: none"> ・感動したことを拾い共感をたしかめる ・患者の訴えたいことをまとめる | 一五分 | <ul style="list-style-type: none"> ・水俣病の症状についてあらかじめ調べさせておく(グループ) ・手記は時間内に読むことが困難なので前もって配布し、特に感動したところは線を引かせておく | <ul style="list-style-type: none"> ・テープ(NHKスタジオオー〇二より) ・写真(桑原史成氏の撮影) ・手記プリント(上野栄子氏のもの) |
| 展開 | <ul style="list-style-type: none"> ◎水俣病認定までの経過を知る イ 原因究明の経過を知る(医師、学者、会社、市、県、国) ロ 死者、患者の対策がどのように行なわれているかを知る <ul style="list-style-type: none"> ・不知火漁民争議 ・契約書 ・見舞金 | 二五分 | <ul style="list-style-type: none"> ・原因究明までの経過は前もって調べさせておく(グループ) ・死者、患者対策の実態を前もって調べさせておく(グループ) | <ul style="list-style-type: none"> ・患者の分布地図 ・水俣湾の水銀量測定図 ・猫実験四〇〇号のデータ ・患者互助会と会社との契約書 ・アセトアルデヒドの生産量と患者発生数 |
| | <ul style="list-style-type: none"> ◎どこに原因があり、責任があるのかを考える ◎どのように処理したらよいのかを考える 国の認定、法律条例、制度予算、被害者補償、企業経営、経済政策 | 一〇分 | <ul style="list-style-type: none"> 詳しい整理的討議は次時にまわす | <ul style="list-style-type: none"> ・公害防除投資 |

5. 「展開」部分の教材の設計

「展開」部分の設計について、田中裕一は後年次のように語っている¹⁶。

私の場合、水俣病というのは凄く難しい問題で、本当に複雑怪奇ですから、とにかくどこで切るかということが一番苦心したんですね。どこで切ったら短い時間で、水俣病の本質を教えられるかということで、結局「猫400号実験」と「契約書」の問題に絞り込んだんですね。それは、最高の学問と、最高の芸術を単純化する教育の法則というものをそういう形で利用したということなんですね。

田中はその際、宇井純の『公害の政治学』(1968年7月)とチッソの附属病院長細川一の手記「今だからいう水俣病の真実」(『文芸春秋』1968年12月号)を参考にしたと述べている¹⁷。

¹⁶ 和井田清司編『戦後教育実践の奇跡～田中裕一リカバリー』(第一集)、2004年、63頁

¹⁷ 和井田清司編『戦後教育実践の奇跡～田中裕一リカバリー』(第二集)、2004年、34頁

宇井純『公害の政治学』は細川医師による水俣病の発見から新潟水俣病の出現（1965年確認）に至る出来事を歴史的に記述し、日本における公害の問題を考察している。その中では宇井自身が発見した「猫400号実験」の実験結果も示されている。しかし、それは「見舞金協定」との関係においてではなく、有機水銀説を提起した熊本大学に対して、1959（昭和34）年以降、四回にわたったチッソ側の反論「水俣湾の水銀を含んだ泥土や、工場排水で魚や猫を飼っても有機水銀は蓄積せず、水俣病が起こらない」との主張に対して出されたものである¹⁸。また、同書には「見舞金協定」の記述もあるが、そこで「猫400号実験」を振り返る明確な記述はなかった¹⁹。

一方の細川一「今だからいう水俣病の真実」は、細川自身による水俣病の発見から、病院内の医師チームによる様々な調査や実験の日々を経て、熊本大学が一足先に実験結果を公表した後、細川が辞表を提出するまでの回想を記したものである²⁰。その中では、「猫400号実験」についても、その前後の出来事も含めて詳細な記述がみられる。しかし、「見舞金協定」については、言及されていない。すなわち二つの出来事をつなげる記述が宇井、細川の文献には見られない。

田中が教材として設計した「猫400号実験」と「見舞金協定」の関係について、それを明示したのは新聞記事であった。朝日新聞の1968（昭和43）年8月27日全国版15面には「隠されていた工場側の実験 廃液のんだネコ発病 34～36年有機水銀も抽出」の見出しで記事が掲載された。記事は宇井純の発見した実験結果に触れながら、「しかも、廃液によるネコの発病は三十四年十二月に成立した漁業、患者に対する補償（原因不明のため見舞金として支給）の少し前に確かめられていたのに、工場側は結果を秘していた。近づく新潟の水俣病に対する政府見解を前にこの研究記録は、波紋を呼びそうだ」と記し、明示的に「猫400号実験」と「見舞金協定」が関連させられて出てくる。この記事は全国版であったが、さらに地方面（熊本版）では翌日以降、関連した記事が続く²¹。つまり、二つの出来事がもつ意味合いは、当時の人々に日常生活のレベルで共有されていたものであった。この一連の記事を田中が目にし「展開」部分の設計の参考にしたかは不明である。しかし、当時の報道や世論を踏まえて教材として設計していったことは推測できるだろう。

水俣病問題の「猫400号実験」と「見舞金協定」の関係への「単純化」は、斎藤喜博のそれ

¹⁸ 宇井純『公害の政治学 水俣病を追って』、三省堂新書、1968年、86頁

¹⁹ 同上、136-141頁

²⁰ 細川一「今だからいう水俣病の真実」『文芸春秋』、1968年12月号、140-148頁

²¹ 具体的には次のような見出しであった。28日：患者や地元で大ショック。“隠されていた”水俣病／補償に新たな波紋、工場の実験が裏目／まだ廃液が百トン、設備変更で残る、有機水銀いっぱい／だまされていた／当局、複雑な反応、水俣病実験問題、会社側「知らぬ」と強気「欺かれていた補償契約」／水俣病患者互助会、“一札”くやむ渡辺初代会長（以上朝日新聞）29日：会社が押しつける？、水俣病患者見舞金契約、法務局が実態調査（以上西日本新聞）見出しは熊本大学が作成したリストに依った。

とは異なっていることが重要である。斎藤は、先に述べた水俣講演において、「文化遺産を『拡大』『強化』『再生』させること」が「私たちの教育」であると述べていた。そこにおいては、「文化遺産」そのものについて問われることはない。国語科を中心とした島小の実践と社会科の田中の実践、あるいは小学校と中学校という違いはあるにせよ、田中のこの授業においては「文化遺産」という固定的なものは存在せず、教師自らが水俣病という教育内容を設計していたのである。

また、これらの新聞記事には「大ショック」「だまされていた」「欺かれていた」という見出しが躍るが、田中は「感動を生のままぶつける」のではなく、「高度な思想化」「結晶化」が必要だと考えていた²²。確かに田中の授業でも、「猫400号実験」と「見舞金協定」の関係を理解した時、生徒からは「ひどかねえ」というつぶやきが漏れた。しかし、授業においては、次章で検討するように、その驚きや憤りを超えて生徒の学習経験が設計されていた。子どもの学習経験の組織化と一体となったところに教材としての水俣病の方法的組織における「単純化」の意味があった。

6. 「展開」部分の学習経験の設計

田中の授業を受けた生徒たちは二つの資料を客観的、俯瞰的に見られる立場におかれていたわけではない。そこに授業における学習経験の方法的組織を見ることができる。「見舞金協定」の説明に続く、田中裕一と生徒たちの会話の記録を見てみよう。

T 第四条を見てごらん、「見舞金」となっているね。これは工場側に原因を認めないから見舞金というのだが、もし自分の責任を認めたら、何というのかね。

P (口々に) 補償金 賠償金

T 第五条を見てごらん。「工場排水に起因したことが決定した場合においても、新たな補償金の要求は一切行なわないものとする……」となっているが、これはどちら側からもち出した条件だろう。

P (ほとんど全部) 会社側

T そうだね。患者たちは苦しかった。あっせん委員の中には、これがめなければ、もうあっせんをうち切るという者もあった。会社も強硬だった。正月を目前にひかえ、借金も払わねばならない二月三〇日の大詰め、患者側はやむなくこの案を呑んだ。

さて、そこでもう一つの資料を示そう。これは秘密の資料なんだが……プリントの資料にも出しておいた。

(猫四〇〇号の秘密実験を書いた応用紙を掲示、説明)

さあ、これはチッソ水俣工場で、附属病院長さんの細川博士らのグループでやったことだが、一〇月に猫が工場排水による水俣病にかかるや否や工場側は、細川博士らにも工場排水をとることを禁じ、以後実験を禁止した。細川博士は工場側の一員として、また医師として大変悩んだ。会社はもとより熊大にもその排水を一切渡さず、熊大も大変研究に困ってしまった。

²² 和井田清司編『戦後教育実践の奇跡～田中裕一リカバリー』(第一集)、2004年、64頁

さて、このこととさっきの契約書は、関係はあるかないか、さあ今度は推理だ。

P (大多数) 関係がある。

T どんな関係がある？

P (男) 猫実験の結果は、会社には知れているのに、契約書第五条をもち出していることがわかります。実験の猫四〇〇号は、昭和三四年一〇月七日に水俣病発病なのに、契約書の日付けは昭和三四年一二月三〇日になっていますから、工場側は自分の所の廃液が水俣病の原因ということを知っていて、わざと第五条をもち出したということになるのだと思います。

(P「そうそう」「ひどかねえ」などの反応、小声で現われる)

T そうだ、大事なのはこの実験と契約書の日付けだ。みんな今、N君が指摘したこと、わかったかな。もう一度誰かに言ってもらおうか、はい、Kさん。

O (女) ……くり返す(確認する)

事前学習においては六つのグループの分業によって多面的に水俣病を把握した生徒たちであったが、「展開」部分においては「患者側」と「工場側」の二つの立場に「単純化」されている。しかも田中は時系列(「猫400号実験」→「見舞金協定」)で資料を提示することはせず、一般の人々に見えた形で、すなわち社会的に経験された順序で資料を提示した。それにより生徒たちは、相手は知っているが、私たちは知らない(知らされていない)という、権力関係としての水俣病を「患者側」の立場から追体験している。田中による生徒の立脚点の提示を含んだ「単純化」は、二つの資料の関係の「単純化」を完遂し、生徒たちの学習経験を組織化していた。

斎藤喜博は『授業と教材解釈』(1975年)において、授業を力動的に遂行するための子どもの発言の選択や省略の必要性を論じており、教材の「単純化」だけではない、子どもの活動や思考の幅における「単純化」の側面を示しているが²³、田中はこれまで多面的に学んできた生徒の立場をあえて二つに「単純化」することによって、授業に「方向性」を持たせている。

このようにして設計された生徒たちの追体験は、生徒たちが患者=知らない者の立場におかれることで可能になっているのだが、そこには同時に、授業を受けている生徒たち=知らない者、授業を行っている教師=知っている者、という授業の構造を重ねてみることもできよう。

この授業は、会話の記録からも明らかのように、田中と生徒の間答の形式で進められていった。そのコミュニケーション構造は、教師の問いかけ(initiative)に生徒が応答(response)し、教師がそれを評価(evaluation)するというメーハンのIRE構造を示している。この構造は授業における様々なレベルでの対話やそれが生み出す学びを規制するものであるが、しかし、その教室の権力構造によって、生徒たちが特定の立場に立って水俣病を見ることができるようになっていることも確かなのである。この良い例が、生徒たちを「患者側」の立場に立たせた後、今度は「工場側」の立場に立たせ「工場=知っている者」の側から考えさせている事実であろう。

²³ 斎藤喜博『授業と教材解釈』、一莖書房、1975(昭和50)年(引用は新装版1995年を使用)、212頁

生徒を権力を持つ者／持たざる者の両方の立場に立たせ、その立場から主題である水俣病に接近させ考察させることは、この授業の場合、教室に存在する教師の権力によって可能になるのであり、「単純化」を実現していく枠づけの中で生徒の学習経験が構成されていることを示している。

7. おわりに——単純化の拡張

水俣病を日本で最初に授業の主題として実践した中学校教師田中裕一は、水俣病という複雑な出来事を「猫400号実験」と「見舞金協定」の関係に「単純化」することによって、また「患者側」と「工場側」の立場に「単純化」して考えさせることによって、水俣病という教材の方法的組織のみならず、生徒の学習経験の方法的組織を可能にしていた。

斎藤喜博が志向した「単純化」は、「授業の単純化」であり、そこにおける「授業」は、教師の指導のみならず、教室の活動全体を指して表現されている。田中の実践において、斎藤から学んだ「単純化」の方法は、教材と学習経験双方の方法的組織を力動的に遂行するための方法として機能しており、それ自体が斎藤の「単純化」からは拡張されて推進されている。そこに田中の「構想力と方法意識」をみることができる。

本稿においては田中が斎藤の理論以外に参考とした芸術の方法論からの影響を検討することができなかった。今後の課題としたい。

謝辞

本稿の作成にあたり、朝日新聞熊本総局水俣支局、熊本県教職員組合、和井田清司先生にご協力いただきました。心より感謝申し上げます。